

機関番号：24302

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520444

研究課題名（和文） New Word Grammar 理論(NWG)による英文法研究

研究課題名（英文） A New Word Grammar Approach to the Grammar of English

研究代表者

菅山 謙正 (SUGAYAMA KENSEI)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：50162855

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、英国を代表する言語学者 Richard A. Hudson が新たに開発し、改良を重ねている WG 理論(New Word Grammar, NWG)の枠組みを把握し、その認知文法的、あるいは構文文法的影響を探ることであった。3 年間に亘って予定していた研究計画に従い、これをほぼ遂行し、NWG の修正点、改良点を明らかにし、言語理論として有望であると結論付けた。研究成果は、論文としても公刊したが、2011 年中には Kyoto Working Papers in English and General Linguistics Vol. 1、『ハドソンの英文法』として開拓社よりそれぞれ、論文集、書籍として刊行する。

研究成果の概要（英文）：The project is a three-year (April 2008 - March 2011) joint Anglo-Japanese research on Word Grammar and its application to the analysis of English and other languages including Japanese. The overall goal of this three-year project is to find out simple and economic ways of explaining seemingly complicated and complex phenomena mainly in English in the framework of WG. The research has been carried out quite successfully and achieved its research goals. The result has shown that NWG is a powerful and promising linguistic theory with its disadvantages overcome and removed. The research results include the translation into Japanese of Richard Hudson's book *An Introduction to English Grammar* based on New Word Grammar, which will come out in later 2011 and the publication of *Kyoto Working Papers in English and General Linguistics Vol.1*, incorporating the research results reported in the workshops both in Japan and the UK, along with the online discussions on the various topics related to NWG across the globe.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：英語学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英文法、New Word Grammar、Syntax、Semantics、Dependency

1. 研究開始当初の背景

(1) 言語学の分野で 'Language is a conceptual network.' (Hudson 1984) という thesis を最初に唱えたのは R.A. Hudson で現在の Cognitive

Grammar の旗手である R.W. Langacker よりも早い。また、R.A. Hudson は、文法に component を設ける modular な立場をとらず、文の semantic structure はその syntactic structure を

naïve に反映させたものであると考える。semantic structure の説明には model と instance の間の inheritance の原則(isA relation)を使って、人間の cognition の仕組みを反映させた NWG 理論を展開している。

(2) 今回の研究は、2002-2004 年度の科研費による WG 研究の成果の上に展開し、代表者が今までに行った WG 理論に基づく英語・日本語の統語・意味構造研究の集大成で、Sugayama & Hudson (2005)の継続研究である。今回は国の内外の研究者と大規模に連携あるいは協力するので、以前より大きな成果が期待された。

2. 研究の目的

今回の研究の目的は、新たに進化した WG が既存の Cognitive Grammar, Construction Grammar などの文法とどのように異なり、どこが文法理論として優れているかを、英語を中心に考えるが、日本語、トルコ語の統語・意味構造の分析にもこの理論が有効であるかどうかを探ることも、研究の射程に入れている。

3. 研究の方法

(1) 研究対象の理論の提唱者 Richard Hudson が英国の London 大学にいたので、彼を海外共同研究者にした。また、研究代表者の長年の友人で同じ枠組みで研究している研究者が英国、スペインにいたので、意見交換、討論、workshop の開催などのため共同研究者とした。

(2) 海外共同研究者：

Prof. Emeritus Richard A. Hudson, Dept of Linguistics, University College London, UK.

Dr Andrew Rosta, Dept of Cultural Studies, Univ. of Central Lancashire, UK.

Dr Nikolas Gisborne, Dept of English Language and Linguistics, Univ. of Edinburgh, UK.

Dr Jasper Holmes, Centre for English Language Teacher Education, University of Warwick, UK.

Dr Joseph Hilferty, Departament de Filologia Anglesa i Alemanya, Facultat de Filologia, Universitat de Barcelona, Spain.

(3) 比較すべき文法(理論)の専門家として以下の各氏を連携研究者として、研究に参加してもらった。各氏は夫々の専門分野から NWG の枠組みを検討した。

連携研究者：

渡辺 勉(拓殖大学商学部教授、WG を中心とした依存文法による英語の文法と意味の記述)

高木宏幸(近畿大学文芸学部教授、Cognitive Grammar)

五十嵐海理(龍谷大学社会学部准教授、意味

論・語用論)

住吉 誠(摂南大学外国語学部准教授、Traditional Grammar, Corpus Linguistics)

前川貴史(北星学園大学短期大学部講師、Construction Grammar, 語彙意味論, HPSG)

(4) 研究代表者は、その専門分野である、統語論と意味論の Interface/Linking の問題をとくに研究した。

(5) また、代表者が前任校の神戸市外国語大学大学院博士課程後期で指導した、一般言語学が専門で、(N)WG をトルコ語の分析に用いて研究成果を上げている吉村大樹君(大阪大学世界言語研究センター特任助教・京都府立大学共同研究員)を研究協力者とした。あわせて、代表者が京都府立大学大学院文学研究科博士後期課程で指導した、現在京都精華大学助手の宮下垂矢子君も研究協力者として参加し専門の Construction Grammar の立場から NWG を批判的に検討した。

(6) 国内の連携研究者、研究協力者とは、研究会・workshop を2ヶ月に1回京都府立大学などで開催し、活発な研究会活動を行った。

(7) これらの研究活動の成果は、日本英語学会第1回国際 Forum(2008年4月26-27日、東京外国語大学)、First Conference of the International Society for the Linguistics of English, ISLE1 (Freiburg, Germany, 8-11 October 2008)、The 18th International Congress of Linguists (Seoul, 21-26 July 2008)、日本英語学会第2回国際 Forum(2009年4月25-26日、奈良女子大学)、The Third International Conference on the Linguistics of Contemporary English, ICLCE3 (Institute of English Studies, Univ. of London, UK, 14-17 July 2009)、英語語法文法学会第5回英語語法文法セミナー(2009年8月7日、関西学院大学梅田キャンパス)、2010 Winter International Conference on Linguistics (Konkuk Univ., Seoul, 5-6 Jan. 2010)、MANAVI M.A.P. International Symposium on Language Education: A New Perspective on Grammar of the English Language for Communicative Language Teaching(Grand Cube Osaka, Osaka, Japan, 20 Feb. 2010)、日本英語学会第3回国際 Forum(2010年4月24-25日、青山学院大)、SICOL 2010 Seoul International Conference on Linguistics 2010 (Korea University, Seoul, 23- 25 June 2010)、英語語法文法学会第18回大会(2010年10月16日、日本大学文理学部)の symposium、日本英語学会第28回大会(2010年11月13日、日本大学文理学部)、電子情報通信学会「思考と言語研究会」『文型と意味』(2011年2月4日、東京、機械振興会館)において、代表者の単独

発表、代表者と連携研究者、研究協力者の共同による symposium、workshop などで公開し、専門家からのコメントを積極的に求め、研究成果の質を客観的に高めた。

(8) 英国・スペインにいる共同研究者とは email による日々の意見交換、代表者が渡英した際の意見交換、共同 workshop などで緊密に連携を取りながら研究を進めた。

(9) New Word Grammar 理論についての公刊、未公刊の文献収集のため、2008 年 8 月 13 日から 9 月 11 日、2009 年 8 月 12 日から 9 月 10 日、2010 年 8 月 6 日から 9 月 13 日、3 回に亘って英国へ出張した。

(10) 英国へ出張時は、London 大学 University College London、Daiwa Anglo-Japanese Foundation において、海外共同研究者の Prof. R.A. Hudson、Dr Andrew Rosta, Dr Nik Gisborne, Dr Jasper Holmes, Dr Joseph Hilferty の各氏と共同研究、workshop を行った。これらの活動は、国外、国内での口頭発表、論文の作成、研究成果の執筆に大いに役立った。

4. 研究成果

(1) New Word Grammar(NWG)では、文の統語構造は図 1 のように動詞を中心として分析される。

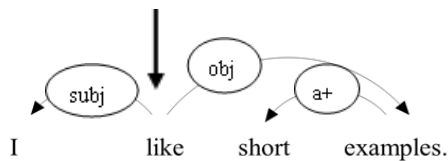


図 1 I like short examples の構造

(2) 今回の研究では、おもに Hudson (2010) で開陳された New Word Grammar 理論の修正点を明らかにした。

(3) NWG は一般的認知能力を言語構造の説明にも導入しようとする言語理論であり、人間の知識が network のような構造を有しているとする仮定が、言語知識のみではなく非言語的知識にもあてはまること、さらに NWG が Chomsky の理論、HPSG、CG、CxG などの競合する言語理論の多くと同じように、言語知識の獲得や学習がどのような過程を経て行われるのかという問いにも解答を提示している点で言語の普遍性の説明を目指す有望な理論であることを明らかにした。

(4) WG の枠組みでは、概念の network (conceptual network)は、音韻、形態、統語、意味といった言語構造の分析のレベル、あるいは言語的・非言語的概念の如何にかかわらず、人間の一般的認知能力を考慮に入れたものと考えられている。具体的には、network

は、異なる 2 つの概念を何らかの関係で連結すると NWG では仮定しているが、この概念どうしをつなぐ様々な関係のうち、とりわけ isA 関係(isA relation)は重要である。



図 2 isA 関係

(5) isA 関係とは、概念がある category の具体例(exemplar)であるとき、その category から様々なプロパティ(特質、property)を継承する(inherit)関係であると言える。また、node は複数の別の node と isA 関係を有していても許される(Multiple Inheritance)。言語知識において語それ自体も様々な特性を有する category の一種と見なされる。node が独自の値を有している場合は、isA 関係を別の category に対して持っていてもその値と両立しないものは継承しないとするデフォルト・インヘリタンス(初期値的な特質継承 Default Inheritance)の枠組みを NWG は採用している。NWG は、isA 関係、関係概念の項(argument)、その値(value)といった関係概念に加えて、人間が生得的に関係づける能力を有していると想定される数量(quantity)に関するリンク、さらに、複合的な isA 関係を認定することで、様々な特性を継承することを可能にする。場合によっては矛盾する 2 つの特性を継承してしまう可能性もあり、このことを防ぐために、異なる 2 つの category が選択的集合(choice-set)を構成し(NWG の枠組みでいう or-relation)、言語構造において互いに矛盾する特性を同時に継承しないような枠組みを NWG は具備していることを示した。

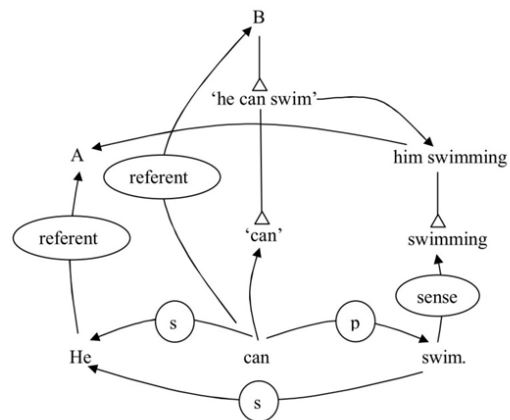


図 3 isA 関係を利用した文の統語・意味構造

(6) 人間には、空間あるいはそれを拡張した

時間に関する認知能力として、ある概念を別の概念と相対的に位置づけができる能力があるとされる。このことをNWGでは「ランドマーク」(Landmark)という関係が概念どうしの間には存在することで説明する。プロパティには、ある概念から別の概念に一方的に向かう単純なもの(eg 車の燃料は石油である)と概念の間に複数の関係があるもの(eg 車の動力供給源はモーターである一方、モーターは車に対して前方に位置するという位置関係がある)があり、このような関係性がデフォルト・インヘリタンスの操作に影響を及ぼすことを確認した。NWGにおける特筆すべき特徴は、概念的 network が静的なものではなく、知覚等によってコンセプトが認識された瞬間に、それに対応する node (NWGの用語では token node) が生成され、そこから既存(すでに脳の中に蓄積されている)の関連する様々なコンセプトに向かって node の活性化が拡散(spread activation)し、適当な node が見つかるや否や、その node から最初に生成された node に向かって情報が継承される(inheritance が起こる)という言語処理のモデルが想定されていることにある。NWGでは、経験に対応する node が既存の適切な node を探し、同一の概念のものであるかどうかを認定することは、束縛(binding)という心的活動により行われると仮定する。この心的活動は、生成文法などの理論では照応(anaphora)の説明に用いられる。これが、言語構造の説明のみならず、言語処理や概念の学習など、より広い現象にも関与している可能性があることをNWGが示唆していることも指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13 件)

- ① Kensei Sugayama, Richard Hudson, Nikolas Gisborne, Takafumi Maekawa, Taiki Yoshimura, Mitsukazu Nakanishi, An Introductory Teach-in on *New Word Grammar*, Papers from the 28th Conference of the English Linguistics Society of Japan (JELS 28)、査読有、2011、190-191.
- ② Kensei Sugayama, The Main Determinants of Sentence Meaning: Verbs or Constructions?, 電子情報通信学会技術研究報告信学技報、査読有、110 巻 407 号、2011、37-42.
- ③ Kensei Sugayama, The Articles and Determiners in English: A Word Grammar Analysis、京都府立大学学術報告・人文、査読無、62 号、2010、17-36.
http://ci.nii.ac.jp/els/110008138633.pdf?id=ART0009656380&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1307956105&cp=
- ④ Kensei Sugayama, The Articles and Determiners in English: An Introduction、英語語法文法学会第 18 回大会予稿集、査読有、2010、66-73.
- ⑤ Kensei Sugayama, Why kono akai hana and akai kono hana Are Both Possible in Japanese: A Word Grammar Account, Kang, Young-Se et al. (eds.). *Universal Grammar and Individual Languages*. Seoul: Linguistics Society of Korea & Hankookmunhwasa、査読有、2010、D-Rom に所収
- ⑥ Kensei Sugayama, English Resultative Constructions Revisited, Proceedings, LSK & KASELL 2010 Winter International Conference on Linguistics、査読有、2010、96-101.
- ⑦ Kensei Sugayama, Towards an Interface between the Verb and the Construction: The Case of English Resultative Constructions、京都府立大学学術報告・人文、査読無、61 号、2009、1-18.
http://ci.nii.ac.jp/els/110008138622.pdf?id=ART0009656362&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1307956221&cp=
- ⑧ Kensei Sugayama, WG and NWG: A Contrastive Introduction、日本言語学会第 139 回大会予稿集、査読有、2009、288-295.
- ⑨ Kensei Sugayama, Towards an Interface between the Verb and the Construction: The Case of English Resultative Constructions, Abstracts Book, The Third International Conference on the Linguistics of Contemporary English、査読有、2009、131.

- ⑩ Kensei Sugayama, How Cognitive/Discourse Factors Can Influence Argument Realisation: A Case of Object Omission, Current Issues in Unity and Diversity of Languages: Collection of the Papers Selected from the CIL18, held at Korea University in Seoul, on July 21-26, 2009、査読有、2009、1250-1270.
- ⑪ Kensei Sugayama, How Discourse/Cognitive Factors Can Influence Argument Realisation Revisited、京都府立大学学術報告 人文・社会、査読無、60号、2008、13-31.
http://ci.nii.ac.jp/els/110007487984.pdf?id=ART0009316679&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1307956355&cp=
- ⑫ Kensei Sugayama, The Main Determinants of Sentence Meaning, Abstracts Book, International Society for the Linguistics of English、査読有、2008、179.
- ⑬ Kensei Sugayama, How Cognitive/Discourse Factors Can Influence Argument Realisation: A Case of Object Omission, Abstracts Book, The 18th International Congress of Linguists、査読有、2008、209-210.

[学会発表] (計 18 件)

- ① Kensei Sugayama, The Main Determinants of Sentence Meaning: Verbs or Constructions?、電子情報通信学会「思考と言語研究会」、2011年2月14日、東京、機械振興会館
- ② Kensei Sugayama (Chair), Richard Hudson, Nikolas Gisborne, Takafumi Maekawa, Taiki Yoshimura, Mitsukazu Nakanishi, WG and NWG: A Contrastive Introduction、日本英語学会第 28 回大会 Workshop、2010年11月13日、日本大学文理学部
- ③ 菅山謙正、石田秀雄、高木宏幸、前川貴史、渡辺 勉、五十嵐海理、The Articles and Determiners in English: An

Introduction、英語語法文法学会第 18 回大会 Workshop、2010年10月16日、日本大学文理学部

- ④ Kensei Sugayama, Japanese Language: A Word Grammar Point of View, Invited Lecture on Japanese Language and Culture、2010年9月8日、Humanities Department, Michigan Technological University, Houghton, MI, USA.
- ⑤ Kensei Sugayama, Some New Developments in Hudson's (2010) New Word Grammar, London Workshop on New Word Grammar、2010年8月23日、Daiwa Anglo-Japanese Foundation House, London, UK
- ⑥ Kensei Sugayama, Why kono akai hana and akai kono hana Are Both Possible in Japanese: A Word Grammar Account, SICOL 2010 Seoul International Conference on Linguistics 2010、2010年6月23日、Korea University, Seoul, Korea
- ⑦ Kensei Sugayama, Why ano subarashii natsu and subarashii ano natsu Are Both Possible in Japanese, While Their Counterparts Are Not Admitted in English: A Word Grammar Account, English Linguistics Society of Japan International Spring Forum 2010、2010年4月25日、青山学院大学
- ⑧ Kensei Sugayama, Knowledge of Linguistics and English Language Teaching: How Best to Incorporate Recent Advances in Linguistics, MANAVI M.A.P. International Symposium on Language Education、2010年2月20日、Grand Cube Osaka, Osaka, Japan
- ⑨ Kensei Sugayama, English Resultative Constructions Revisited, 2010 Winter International Conference on Linguistics、2010年1月5日、Konkuk University, Seoul, Korea
- ⑩ 菅山謙正 (招待講演)、New Word Grammar at Work: How NWG structures

the language、大阪市立大学英文学会 2009 年度大会、2009 年 12 月 5 日、大阪市立大学大学院文学研究科

- ⑪ Kensei Sugayama (Chair), Taiki Yoshimura, Takafumi Maekawa, Workshop, New Word Grammar at Work: How NWG Structures the Language、日本言語学会第 139 回大会、2009 年 11 月 29 日、神戸大学国際文化学部
- ⑫ 菅山謙正、構文の意味と動詞の関係について－英語の結果構文は如何に認可されるか－、英語語法文法学会第 5 回英語語法文法セミナー、2009 年 8 月 7 日、関西学院大学梅田キャンパス
- ⑬ Kensei Sugayama, Towards an Interface between the Verb and the Construction: The Case of English Resultative Constructions, International Conference on the Linguistics of Contemporary English 3、2009 年 7 月 14 日、Institute of English Studies, University of London
- ⑭ Kensei Sugayama (Chair), Kuniko Shin-ike, Ayako Miyashita, Yusuke Yoshikawa, Hiroyuki Takagi, Kairi Igarashi, Workshop, Towards an Interface between the Verb and the Construction: The Case of English Resultative Constructions, English Linguistics Society of Japan International Spring Forum 2009、2009 年 4 月 26 日、奈良女子大学文学部
- ⑮ Kensei Sugayama, The Main Determinants of Sentence Meaning: Verbs or Constructions? International Society for the Linguistics of English、2008 年 10 月 12 日、Albert Ludwigs Universität, Freiburg, Germany
- ⑯ Kensei Sugayama, How Cognitive/ Discourse Factors Can Influence Argument Realisation: A Case of Object Omission, International Congress of Linguists 18、2008 年 7 月 22 日、Korea University, Seoul, Korea.
- ⑰ Kensei Sugayama, The Main Determinants

of Sentence Meaning: Verbs or Constructions?, English Linguistics Society of Japan International Spring Forum 2008、2008 年 4 月 27 日、東京外国語大学

- ⑱ Kensei Sugayama (Chair), Takafumi Maekawa, Taiki Yoshimura, Workshop, Introduction to New Advances in Word Grammar, English Linguistics Society of Japan International Spring Forum 2008、2008 年 4 月 27 日、東京外国語大学

〔図書〕 (計 2 件)

- ① Sugayama, Kensei (ed.), Kaitakusha, Kyoto Working Papers in English and General Linguistics Vol. 1, 2011, 300
- ② 菅山謙正、開拓社、ハドソンの英文法、2011、200

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.asahi-net.or.jp/~sp4k-sgym/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅山 謙正 (SUGAYAMA KENSEI)
京都府立大学・文学部・教授
研究者番号：50162855

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

渡辺 勉 (WATANABE TSUTOMU)
拓殖大学・商学部・教授
研究者番号：40210918

高木 宏幸 (TAKAGI HIROYUKI)
近畿大学・文芸学部・教授
研究者番号：90319757

五十嵐 海理 (IGARASHI KAIRI)
龍谷大学・社会学部・准教授
研究者番号：30329338

住吉 誠 (SUMIYOSHI MAKOTO)
摂南大学・外国語学部・准教授
研究者番号：10441106

前川 貴史 (MAEKAWA TAKAFUMI)
北星学園大学短期大学部・英文学科・講師
研究者番号：50461687